寄託文書紹介1

鮎瀬健一家文書

県立文書館では、古文書の寄贈・寄託を受けています。現在までに寄贈文書一件、寄託文書二十件、総計五万一千点余にのぼります。そのうち、那須町伊王野一、四七九番地の鮎瀬健一氏から寄託されている文書を紹介します。

鮎瀬健一家文書は、寄託された文書だけでも七、八二八点あり、県内で最も多数の古文書を所蔵する家の一つに数えられます。

鮎瀬梅園翁の碑の側にある「命日燈」にきざまれている塾生の数。「筆道・算術門人凡三百余人」とある。

那須町伊王野の正福寺境内

鮎瀬家は、那須一族伊王野家の家臣として中世以来の武士でしたが、江戸時代初期の寛文年間に主家が断絶したことによって土着帰農し、天領となった伊王野村の有力農民として代々名主役を勤めて来ました。

そのため、幕藩体制下の農村社会や農民生活を知る基本的な史料となる年貢割付状、検地帳、五人組帳、宗門人別改帳などが残っています。例えば、天保二年の「家数人別改書上帳」によると、伊王野村の戸数・人口は一七六〇年(宝暦一〇年)に一七五軒・七〇八人であったものが、一八三〇年(天保二年)には九八軒・五一五人に減少していることがわかります。そのほか芦野宿への助郷役や山林・酒造・寺社関係や村絵図などと共に、私的な年中行事に至る広範囲な文書を含んでいます。

幕末・明治維新の激動期を乗り切ったのは、鮎瀬梅園(祐之丞)・梅村(淳一郎)父子です。梅園は名主という公的な役職を勤めるかたわら、私塾を開き近隣の子弟の教育に意をそそぎました。公用で江戸に出た梅園は、教え子たちに東雲堂の筆を土産として与えるのを楽しみにしていたというエピソードも伝えられています。

父の跡を継いだ淳一郎は、地租改正担当人、戸長、村会議員、県会議員などの公職を担い、また印南丈作・矢板武らと那須開墾社を興し、村内官有地の払下げをうけて村の基本財産三百町歩を設け、下野産馬共同組合を組織し、養蚕、林業などの殖産興業にも尽力しました。

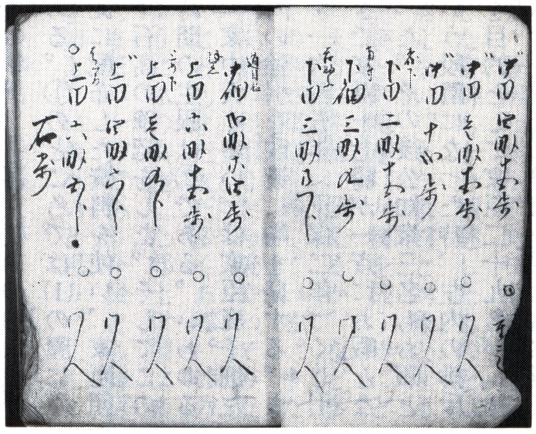
鮎瀬家文書の特徴は、この梅園、梅村とその跡を受けて大正期に県会議員となった善太郎を含めた三代の広範囲にわたる近代資料が保存されていることにもあります。

それは、鮎瀬家の歴史であると同時に、伊王野村はもちろん、栃木県や日本の歴史にまで広がる私たちの足跡を今に伝えています。

鮎瀬健一家文書は、県立文書館で利用できます。

(仲田凱男)

〈鮎瀬健一家文書の一例〉



◀土地台帳である「名寄帳」

◀今の戸籍を兼ねた「宗門人別改帳」